

のの残存であり、近接した小地域のものは比較的新しいものである。かくしてこれ等の関係はそのまま民族と文化との移動とその方向を示す。

(通産省大阪工業技術試験所精油研究室)

文 献

- 1) 藤田：台湾博物学会會報，26，190 (1936)．
- 2) 松本：古代文化論，47 (1932) (現代史学大系 10)．
- 3) Laufer: Sino-Iranica, 268 (1919)；松本：南亞細亞学報，1，20 (1942)．
- 4) Heyne: Nutt. pl. Nederland. Ind., 1, 517 (1927)．
- 5) Yule, Burnell: Hobson, Jobson, 89 (1903)．
- 6) Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl., 2, 4 (1923)；Brown: Min. Prod. Phil. Forest, 3, 66 (1921)．
- 7) Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl., 2, 4 (1923)．
- 8) 鹿野：東南亞細亞民族学，先史学研究，120 (1946)．
- 9) 奥田，岡田，野村：大南洋 (太平洋協会編)，352 (1942)．
- 10) Brown: Min. Prod. Phil. Forest, 3, 66 (1921)．
- 11) 佐々木：台湾博物学会會報，10，152 (1920)．
- 12) Burkill: Dic. Econ. Prod. Malay Pennis., 1738 (1935)．

〇ヤグラタマネギ (新稱) に就て (青葉 高) Takashi AOBA: Top Onion cultivated in Japan.

昭和 25 年山形県東田川郡押功村佐藤氏培養中の櫛葱と称するものを調査の結果、これが所謂 Top Onion であることを認めたが、最近農林省九州支場園芸部長熊沢三郎氏よりも同様に認定され、且本種が青森、岩手県下で栽培されて居る事を報らされた。

従来此の Top Onion は我国の園芸書にも玉葱の変種 *Allium cepa* L. var. *viviparum* Metz. として記載されては居るが、本邦内の栽培例は見当らず、従つて和名もなく、熊沢氏も“*A. cepa* 系の櫛葱”と称して居る。併し *A. fistulosum* L. var. *viviparum* Makino がヤグラネギの和名で呼ばれているのであるし、同名で本種を呼ぶ事は適当でなく、しかも本種が現に我国で培養を見て居るのではあり、此の意味から Top Onion はヤグラタマネギと呼ぶのが適当であらう。

但し本種が眞の Top Onion である事に就ては猶若干の疑点もあり (本系統の染色体はネギ及びタマネギのそれと全然異り、むしろワケギの染色体と極めて類似して居る。栗田氏未発表) 是非とも眞の Top Onion と比較する要がある。

尙本種の特性は下記の通りであるが、更に本種は雌性不稔系と認められ、此の点からも興味あるものである。

特性 草丈，60 (以下単位 cm)．葉鞘部の長さ 14，地下球の横径，2.6，縦径 3.9，花莖の長さ 1 段 63，2 段 31，3 段 5，最も太い部の径 2，胎芽の横径 1.7，縦径 1.9，胎芽数は 1 段目 4.7，2 段目 2.8，3 段目 2.0，花数 17~180．花穂分化期は 2 月，抽苔 5 月中下旬，開花 6 月下旬，夏期には葉が枯れる。花はタマネギの類に似る。但し葯の退化のため結実せず，胎芽に依り繁殖する。春日生長した葉身を球と共に食用とする。

(山形大学農学部園芸学教室)